探究学習に取り組む生徒にどのように寄り添い、彼らをどう支援するか。
探究学習における生徒へのかかわり方を、多くの教師が模索している。
もがき、苦しみながらも自らのありようを見いだそうとしている2校の教師の今を追った。

CASE 1　見通しが立ちにくい教育活動での支援のあり方を模索する

目の前の生徒とともに「自分らしい探究」を追究する

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校　森　俊雄、大坪亮平

課題設定ができないのは、モヤモヤを追究していないから?

「本当にこれは、このメンバーで取り組みたい課題なの?」と問う森俊雄先生。

「……」と返す言葉に詰まってしまう生徒たち。

「……みんなが興味を持って取り組める課題って、どういうものなんだろうね。これだ!というものが見つかるといいね」という森先生の問いかけに、生徒たちは考え込んでいる様子だった。

2019年3月の探究プロジェクト開始からおよそ5か月が過ぎた8月末、森先生と大坪亮平先生が受け持つ約30人の生徒たちは、教育、心理、経済、環境などの領域別にチームをつくり、探究学習に取り組んでいた。活動が一区切りを迎える10月中旬まで残り2か月足らずとなったが、多くのチームは、この時点でも課題設定に苦しんでいた。

少し調べればすぐに結論が出そうな課題を設定しようとする生徒を見て、森先生、大坪先生は、当初は、知識の少なさが原因だと考えていた。だが、これで進めていこうと思える課題にたどり着ける生徒と比較して、知識の量にそれほどの差があるようにも思えなかった。

大坪先生は、「自分たちが納得できる課題に到達できない生徒は、自分たちの中のモヤモヤに向き合いきれていないのでは」と考えるようになったという。

「私が受け持つ2チームは、環境問題という領域で課題を考えています。話し合いの過程では、汚染された地球を捨ててほかの惑星に移住する計画や、環境問題におけるマスメディアのあり方など、ユニークな観点での意見が出てきます。それなのに、なぜか最後は『温暖化』という

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

◎「清く・かしこく・やさしい女性に」を教育方針として、カトリックの精神に基づき豊かな人間性を育む教育活動を展開。英語教育にも力を注ぎ、グローバルに活躍する女性を育成する。近年は、企業などと連携し、「正解が分からない問題」を多面的に考える探究学習も積極的に展開している。
◎設立　1935（昭和10）年
◎形態　全日制／普通科／女子
◎生徒数　1学年（高校）約180人
◎2019年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、筑波大、島根大、佐賀大、長崎大、北九州市立大、長崎県立大などに21人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、津田塾大、長崎純心大などに延べ141人が合格。
◎URL　http://www.n-junshin.ed.jp/

純心女子高校の探究学習

共通のメインテーマの下、チームや個人で課題を設定

同校の「探究プロジェクト」は、高校2年生、3年生を対象に、3月から10月までの約8か月間行われる。生徒はA、B、Cグループのいずれかに所属して活動する。Aグループは、「探究プロジェクト」に積極的にかかわりたいと希望した生徒から成り、チームで協働する。他チームと進捗状況を共有しながら進める。Bグループは、Aグループのように進捗状況などは共有しないが、チームで探究学習を進める。Cグループは、個人での探究学習となる。森先生、大坪先生は、Bグループを担当している。

メインテーマ「あなたはどんな未来を描きたいか」の周りに、すべてのチームや個人の探究テーマが記され、19年度の同校の「探究マップ」が完成する。

事象の枠に収まってしまいます。温暖化について説明する書籍やウェブサイトは数多くありますから、言語化しづらい自分の思いや疑問を深めることよりも取り組みやすい情報収集などを優先してしまっている気がします」（大坪先生）

モヤモヤに丁寧に向き合えないのは、生徒が時間や人間関係の面で無意識に折り合いをつけているからかもしれないと、森先生は考えている。

「時間に限りがある中で、チーム全員が取り組める課題はこのあたりだろうと妥協して決めているようなところもあると思います。せっかくチームで活動しているのですから、興味・関心が異なるメンバーがそれぞれの考えや知識を粘り強く突き合わせて、みんなが心から『これは面白そうだ！』と思える課題にたどり着ければよいのですが……」（森先生）

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 **森 俊雄** もり・としお
教職歴 13 年。同校に赴任して 13 年目。数学科。進路指導部。

「課題設定に至らない生徒の中にも、思考を深めている生徒はたくさんいます。さらに『自分はどんな大人になりたいのか』と将来のキャリアにつなげている生徒もいます。そこに既に価値があることを伝えたいと思っています」

モヤモヤに価値があったことを生徒に気づかせたい

森先生、大坪先生にとって最も身近な探究学習は、先輩である槌本六秀（つちもとひで）先生が17年度から取り組んできた活動だ。それは、希望する生徒が企業と連携し、社会問題の解決案を提案するというものだったが、発表時の生徒たちの姿を見て、「高校生はここまでできるのか」と2人は感嘆した。だが、課題の設定を生徒自身が行うなど、進め方が異なる今年度、生徒に同じ成果を求めるのは難しそうだと感じていた。それ以上に、教師である自分たちが成果発表にこだわってしまうことで、生徒が教師の期待に応えようとつじつま合わせのような発表をして、中途半端な達成感を味わわせることは避けたい……

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 **大坪亮平** おおつぼ・りょうへい
教職歴9年。同校に赴任して9年目。生物科。進路指導部。

「温暖化から家庭の電力消費量の話になった時、ある生徒が『中学校で習った公式が使えるよね。今度、中学校の時の教科書を持ってこようよ』と言いました。探究学習と教科学習の関連に生徒が気づいた瞬間に感動しました」

森先生と大坪先生は、「成果の発表に重きを置かず、納得するまで課題を追究させ、苦しんだ過程を語らせよう」と考えるようになった。

実は、今年度の探究プロジェクトが始まった時、2人は槌本先生から、「希望者だけが参加してきたこれまでと異なり、今年度の参加者は、探究学習に強い関心を持っている生徒ばかりではないのだから、成果発表ありきで考えなくてもよいと思う」と、助言を受けていた。実際、生徒の中には、課題設定にたどり着かないまでも、興味や疑問が少しずつ深まっている者が確かにいる。それなら、自分が悩んできたことや、考えが変わったり深まったりしたことに価値を見いださせることもできるのではないか。森先生、大坪先生は、夏季休業明けの最初の探究プロジェクトの時間で、生徒に「納得いく課題にたどり着くことを1つのゴールにしよう」と説明することにした。

「2学期からは、課題設定と並行して、これまで話し合ってきたこと、調べてきたことを俯瞰しながら、自分たちの考えの変化や深まりも可視化させていきます。生徒たちの『苦労した』『モヤモヤした』時間の中から、『実はこれだけ成長していた』という成果を見いだす支援をしていきたいです」（大坪先生）

2学期最初の授業では、夏季休業中に調べてきたことをチーム内で共有しながら、これまでの活動の足跡を振り返った。

「『これまでの話し合いの記録を見て、最初は自分の視野が狭かったことに気がつきました。物事を考える時は、意外な視点も含めて多角的にアプローチすべきだと思いました』と語る生徒がいるなど、多くの生徒が内面的な成長を自覚していました」（大坪先生）

見通しが立ちにくい探究学習での教師の役割とは？

夏季休業を経て、自分が探究したい課題やそれに決めた理由を熱く語る生徒が増えてくるなど、生徒の変化や成長が少しずつ見えてくる中、森先生、大坪先生が痛感するのは、「見通し」を立てることの難しさだ。

「教科の授業であれば、この時期までに生徒にここまでの学力を身につけさせよう、そのためにこんな指導をしようと、見通しを立てやすいものです。それは、問いを投げかける主体が私たち教師であるからでしょう。一方、探究プロジェクトでは、生徒がいつ、どういった状態になっているのかを見通すのは、非常に難しいです。それは、生徒自身が問いを立てなければいけないからだと思います」（大坪先生）

探究学習において、課題設定につながる問いを立てようとする生徒に、教師はどのような支援をすればよいのか。森先生、大坪先生は、まさに教師としての探究の道を歩きながら、その答えのヒントを生徒から受け取っている。

「児童虐待の問題に関心を持つ生徒が集まったチームは、課題を決めようと、探究プロジェクトの授業後もずっと話し合っていました。そばでその話し合いを聞いていた私は、『理想の状態を実現するためには、何をすればいいんだろうね』と、つぶやきました。それは、私が率直に疑問に思ったことでした。しばらくして1人の生徒が、『法律を整備すれば、児童虐待は減るはず』と言いました。すると別の生徒が、『でも、日本よりも法整備が進んでいるのに、虐待が多い国があるよ』と言いました。『そうなの?!』『なぜ?』と生徒たちがさらに話し合い、考え込む様子を見て、私はとてもワクワクしました。今ではそのチームは、児童虐待について私にいろいろ教えてくれるほど、様々な視点で課題を深掘りしています。私がつぶやいた疑問は、そのチームの今の状態をつくる1つのきっかけになったと思いますが、私は見通しを持って生徒に、その疑問を投げかけたわけではありません。ただ、生徒の話を聞き、気づきや疑問を率直に伝えただけでした」（森先生）

「探究プロジェクトにのめり込んでいる生徒をよく観察していると、『そんな冗談を！』と言いたくなるような突拍子もない発言をすることがあります。そして、教科の授業では出てこないような発言が、ほかの生徒にとっての予想外のヒントとなっていることもあります。そうした場面を目にすると、私が果たすべき役割は、何かを示すこと以上に、何でも自由に発言できる場をつくり、『面白いね！』『それって、どういうこと?』と、一緒に楽しむことかなと思っています」（大坪先生）

今年度、初めて取り組んでいる探究プロジェクトについて、「楽しみよりも不安の方が大きく、底が見えない海に飛び込んでいる思いだった」と森先生は率直に語る。

「底が見えなくて不安だから、槌本先生から少しでも学ぼうとしてきました。でも、いつの間にか、先輩の考えからずれることは正解からずれてしまうことだといった意識になっていたのかもしれません。成果を急がず、私自身が本質思考になることで、自分らしい探究をつくりたいと、今は思っています」（森先生）

「本当にこれが、生徒と取り組みたい探究なのか」。森先生、大坪先生はその問いに、今も生徒とともに向き合っている。

森先生、大坪先生のメンター・槌本先生が12ページに登場します

自分なりの「探究」を試行錯誤の中で見いだしてほしい

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
槌本六秀先生

森先生、大坪先生は、探究というものを理解しようとしているし、さらに探究学習を通して生徒そのものをよく理解しようとしています。ただ、探究を理解するためには何をどうすればよいかということに、とらわれているきらいもあります。「やってみたけれど違った」を繰り返すことで、「私だからこんな力を生徒に育める」といった、自分なりの探究を見いだしてほしいと思います。